

屋島の語り部

は じ め に

平成八年春三月 天 野 忠

数年前より、せめて自分の住む大橋前地区の、民話に類する物、言い伝えなどを収集しておこうと思っていたが、暇があり過ぎるということは厄介なもので、逆になかなか取り掛かることができなかった。

これでは何時までたっても記録することができないと、昨年七十才になったのを契機に、収集を始めることにして、まず大橋前地区をまわってみることにした。

この時、六十才代、七十才代の方達は、少年時代や青年時代を何らかの形で戦争に影響されていたのか、祖父母から昔話を聞く機会がなかったのか、この種の話を知っている方が少なく、**八十才以上の方でなければ聞く事が出来ない**ことが分かったし、ある方は、「**こんな話でよかったら、何ほでも知っていますよ**」と言ってくれていたが、再度の訪問を予定していたところ、この九十二才の長老は昨年亡くなっていたし、長期の入院をよぎなくされた方もいたし、これでは折角の昔話が聞けなくなると、精力的に収集してみることにした。

計画は各地区で二名乃至三名位の長老から、聞き取りをしようと思っていたが、なかなか計画通りいかず、不十分の感無きにしも非ずであるが、**屋島の語り部と言われている壇の浦の藤岡元栄氏・他の皆さんの御協力を得て一応纏めてみた**。

なお、今後この種の話を書く機会があれば、逐次これに追記していくことにしたい。

狸 伝 説（１）

屋島多三郎狸

１．屋島狸の命名

浦生・新田庄市氏より聞書

屋島の狸が、香川県や四国内は勿論日本中で有名になったので、名無しではどうも格好がつかないから、名前をつけようということになったので、尾原清行（之）氏が『多（太）三郎』と命名したと言う。

２．多三郎狸

屋島寺境内蓑山大明神案内板及び山上土産物店主森清氏所有のパンフレットより抜粋

屋島に生まれ屋島で大きくなった多三郎狸は、お父さん狸やお母さん狸に可愛がられて育てられ、毎日山の中を駆け回って遊ぶ元気な子狸であった。

昔々、嵯峨天皇弘仁元年（８１０）に弘法大師が、勅命で屋島山の北嶺にある寺を南嶺に移す為に屋島山へ登山の途中、突然の強い雨風の為に困っている様子を、この多三郎子狸が見て、

「さぞ、お困りであろう」と、蓑を差し出して、道の無い山をかき分けて山上へ案内した。

このように多三郎狸は親切で、大変評判の良い可愛い狸であった。大人になってからは、阿波の金長狸の兄貴分となり仲良く

していたが、ある時、かの有名な阿波の狸合戦が始まり、なかなか結末がつかないので、その仲介をかって出て見事喧嘩を止めさせることができた。

こんなことがあってから後は、だんだんと人気上がり、四国狸の総大将におさまり、淡路の団三郎狸、佐渡の柴右衛門狸と共に日本三大狸と賞賛されるようになった。

又、この頃狸の教養を高める為に創設された、日本屋島狸大学の総長となり狸界に貢献すると共に、高松淨願寺の白禿狸と親交をもち、良き相談相手となったと言う。

この後年老いてからは、一番弟子八兵衛狸に面倒をみられて余生を送っていたが、屋島寺に異変ありと感じた時はいち早く住職に知らせ、又、住職が代替りした時は、屋島寺の『雪の庭』を戦場に見立てて、過ぎし寿永の昔の源平屋島檀の浦の合戦の様子を、住職達に囁き物入りで再現して見せていたという。

昭和十三年頃時の安永住職は、『雪の庭』がにわかに滄海に変じて、鎧武者が現れ物凄い雄叫びと共に、勇ましい昔の合戦の夢を見たという。

今、多三郎狸は屋島寺の本堂と大師堂の中程に、約1・5メートル位の石碑に『蓑山大明神』と刻まれて祀られ、狸は生涯一夫一婦制を硬く守る為、和合神として、又良き縁談をもたらす福の神として、里人は勿論のこと、観光客の崇敬の的となって日夜訪れる人が絶えない。

（後記）

- 1) 俗に言われている阿波の狸合戦は、讃岐の多三郎狸と阿波の金長狸との縄張り争いが原因の合戦であると言われているが、
本当は阿波の狸族の間で起った争いを、話を面白くする為に創作されたものであろう。
- 2) 多三郎狸は、源義経が平家討伐の為阿波から讃岐入りした時、阿波からお供をして屋島へきて棲みついたと言う説があるが、元々屋島で生まれ育ったので、その説は誤りであるという。
- 3) 屋島山上の土産物店で販売している狸の焼き物は、全部信楽焼であると、森清店主から聞いたが、屋島独自のものとして屋島焼が復活できないものであろうか。

3. 多三郎狸の出陣

1) 日露戦争に出陣

浜中・青木正彦氏より聞書

日本が明治三十七、八年にロシアと戦端を開いた時、乃木将軍が率いる善通寺第十一師団・丸亀第十二連隊は、二百三高地攻略の戦いに参加した。

言わずもがな屋島出身の兵士も、この師団・連隊に所属していたので、二百三高地の激戦に参加して多数の戦死者をだした。この戦況を心配した**多三郎狸は、高松の淨願寺の白禿狸と相談してこの戦争に参加**した。これによって、日本軍を大勝利に導いたと言う。

2) 日露戦争に参戦

新馬場・大西シゲノ氏より聞書

日露戦争の時、戦争に参加して、日本を大勝利に導いたという。

3) 日露戦争に参加

浦生・新田庄市氏より聞書

明治三十七年に勃発した日露戦争の時、乃木将軍が総司令官として率いる、善通寺第十一師団及び丸亀第十二連隊は二百三高地へ出撃した。この戦争は熾烈を極め、屋島では新田氏の叔父、新田紋太郎氏他十二名が戦死した程の激戦であった。

戦死者

松木喜一	歩兵少尉	谷東松太郎	歩兵一等卒
山口秋蔵	歩兵上等兵	鎌野庄次郎	歩兵一等卒
吉岡音吉	歩兵上等兵	倭伽寅吉	歩兵一等卒

谷岡喜太八	歩兵上等兵	岡田千三郎	歩兵一等卒
新田紋太郎	歩兵上等兵	大高晴治	歩兵一等卒
佐々木善吉	歩兵一等卒	木村恒吉	歩兵一等卒
三浦庄吉	歩兵一等卒		

露軍もさることながら、我が軍も多大なる損害を被った。これを憂いた**多三郎狸は、四国の狸を全員屋島に集めて、自らが総大将となって出陣した**。玄海灘を航行中に各自は得意の術で、鉄砲や機関銃に化けて朝鮮半島に上陸した。親友である浄願寺の白禿狸は、南京袋に小豆を一杯詰めて持って行き、それを敵前でばらまいた。すると一粒一粒が一人一人の兵士に変身して、それぞれが敵陣へ突っ込んで行った。これにより日本軍は大勝利を収めた。

後日、乃木将軍とステッセル将軍は、かの有名な水師營のナツメの木の下で、硬い握手をかわした。この時、乃木将軍が小さい声で、

「ステッセル君、もっと頑張るかと思っていたが、案外、もろかったね」

「いや・・・、乃木さん、前は精鋭な君の軍隊であるし、後は真っ黒な軍隊が波のように押し寄せて来たので、降伏したんですよ」

「君の軍隊を包囲すべく、黒木将軍が進軍していたが、まだ到着していなかった筈ですがね」

二人は、狸の応援軍であったことを、知らなかったらしい。

（註）当時の日本の陸軍の軍服は、黒色であったそうである。

4. 屋島檀の浦の源平合戦

1) 演芸会を開く

檀の浦・藤岡元栄氏より聞書

昔、多三郎狸は満月の夜になると決ったように、一族郎党子狸まで集めて、屋島寺の『雪の庭』を舞台に、過ぎし寿永の昔の屋島の檀の浦の源平合戦の様子を、鎧武者の源義経になったり、弁慶になったりして、時には**鳴り物入りで実演して見せていた**という。

2) 源平合戦の実演

浦生・新田庄市氏より聞書

多三郎狸は年老いてからは、一番弟子の八兵衛狸に見守られて安らかな生活をしてきたが、屋島寺に異変があると感じた時は住職に報告したり、住職が代替わりした時は、『雪の庭』を海に見立てて、過ぎし屋島の檀の浦の合戦の様子を再現して見せていたという。**昭和十三年頃、時の安永住職は夢にこれを見たという。**

このような言い伝えがあることから、安永住職から元高野山の管長であった尾崎住職に替わった時、香川新報の記者がこのことを取材に寺を訪れたが、新住職は、「**そんなものは見なかった**」と返事をしたそうである。

土地の人達は、

「言い伝えと言うものは、嘘が多いものであるから、見たと言ってくれば良かったのに」

と言っていたそうである。

3) 源平合戦を見られる資格

地蔵寺住職・天野龍鳳師より聞書

多三郎狸は屋島寺の住職が代替わりした時、屋島寺の『雪の庭』を戦場に見立てて、源平屋島の檀の浦の合戦の様子を、鳴り物入りで見せていたと言う伝説は、坂本住職が見たのが最後であり、その時以降この伝説が途絶えたと言うから、明治四十五年までであったと言う。

そして合戦の様子を見ることが出来たのは、地蔵寺住職が屋島寺住職に昇格した時、又、その弟子の地蔵寺住職から屋島寺住職になった人のみに、即ち、屋島寺住職と師弟関係にあった屋島寺新住職のみが見ることが出来たと言う。

5. 屁力競べ

大橋前・飛倉堅二氏より聞書

昔々、屋島の多三郎狸と阿波小松島の金長狸は、それはそれは仲の良い親友であった。ある時、つまらない一寸したことで仲違いしてしまったが、いつまでもこれではいけないと、勝負をして決着をつけることにした。

ある日、二匹は子分を引き連れて、約束をした讃岐と阿波の国境に出かけて行った。

先ず最初に多三郎狸が、石の立臼に尻の穴をあてがい、思いきり大きい大きい屁をこいた。すると立臼は高く高く舞い上がり、眉山のテッペンまで飛んで行ってしまった。

これを見ていた金長狸は、「奴もなかなかやるわい・・・」と眉山へ登って行って、尻をまくって、立臼に尻の穴をあてがい、讃岐の方に向かって大きい大きい屁をこいた。すると立臼は高く高く舞い上がって見えなくなってしまった。皆で手分けして探したが見つからなかったので、『勝負無し』ということにして、それぞれ引き上げることにした。

多三郎狸が屋島へ帰ってみると、屋島寺の本堂の軒下に張った蜘蛛の巣に、立臼がひっかってブラブラと揺れていた。

6. 化け競べ

檀の浦・藤岡元栄氏より聞書

昔々、讃岐は屋島の多三郎狸と阿波は小松島の金長狸が『化け競べ』をすることになって、二匹は国境へ出張って行った。

多三郎狸が、街道筋の大きい松の木に登って東を眺めると、制し声高らかに、

「下に、下に」と大名行列がやってくる。先払いに続いて奴、毛槍、弓、鉄砲、徒士が粛々と隊列を組んでやってくる。

「金長も、なかなかやるわい」と松の木からスルスルと下りてきて、
「もう、分かった分かった、それ位にしとけ、お前の方が俺より上手いわ」と言いながら、
供先へ出て行くと、

「何を・・・、この百姓め、供先を汚すとは不屈き者、そこへ直れ手打ちにいたしてくれ
る」

と言うが早いか、バラバラと侍がやってきて、散々殴られた。これが本当の大名行列だと、まだ気が付かない多三郎狸は、

「もうええが、分かっとる分かっとる・・・」

「何を言うか、この不埒者め」と又、コッピドク殴られたので、とうとう多三郎狸は気絶してしまった。

この光景を後に、参勤交替のため江戸へ向う行列は、何事も無かったように静かに通り過ぎて行った。

この様子を見ていた金長狸は、多三郎狸を抱き上げて、
「かわいそうに、もうこれからは、こんなアホなことは止めよう」と言いながら何時までも、何時までも涙を流していた。

屋島の狸達

いたすら狸

大橋前・江浪雪雄氏より聞書

昔々、西潟元村の産土神である牛頭（ゴツ）天王社（現在の八坂神社）の御旅所に、太いモクの木があって、その根元の腐った洞穴に狸が棲みつくようになった。

ある日、お爺さんがお婆さんに食べさせようと、狐寿司を買ってこの所へさしかかった時、

「お爺さん、何持っとんな」と人間に化けた悪戯狸が出てきた。

「おお、これか婆さんに食べさせようと、狐寿司を買って帰るとこじゃ」

「ほおな、お婆さんが喜ぶだろうの・・・」

こんな話をしている間に、狐寿司は小石にすり替えられて、お爺さんはすぐ横の大谷川に投げ込まれて、泥もぶれになった。

不動さん裏の狸

大橋前・東原末義氏より聞書

大橋前の不動尊堂が榊谷本家の前にあった頃、お堂と榊谷さんの間は相引川の北側の土手であり、又、道路であった。

その頃、この土手道を狸が大勢集って、提灯行列をしているのを、度々見たことがあると言う。

焚き火をする狸

大橋前・高杉イサ工氏より聞書

現在、四国電力学園と屋島総合病院がある所は、そのずっとずっと昔は田圃であった。

その頃、相引川の北側の土手は昼でも薄暗い程の松が生えており、沢山の狸が棲んでいた。

ここの狸は仲間を誘って、時々この土手で焚き火をしていたという。

これは実際に見た人から聞いた話であるという。

大橋の牝狸

大橋前・林 仲二氏より聞書

昔、相引川に架る大橋（大橋前地区にある）の東側のお堂辺りに、可愛い牝狸が棲んでいた。

この狸はやさしい娘盛りの牝狸で、夕方になると娘姿に化けて、橋の東側に現れ村の若い衆を喜ばせていた。

このように奉仕の精神が旺盛な狸であるから、これを一目見ようとして夕方になると、若い衆がこの小さい石橋の大橋に集ってくる。頃合いを見計らって娘姿に化けた牝狸が現れ、着物の裾を捲りあげて皆の方へ向いて相引川をひとまたぎする。

この頃の人間の女性は、まだパンツをはく習慣がなく、着物の下はすぐ腰巻きであったから、娘狸も真似してかパンツをはいていなかったのも、股間がモロに見える。

「いよ、ベッピン」と褒めると、益々股をひろげる。

この牝狸は年頃であったから、素晴らしい牡狸を見つけて結婚しただろうが、若い頃村の若い衆を喜ばたことを思い出しているだろうか。

明神橋の狸

大橋前・鎌野松吉氏より聞書

タダノ鉄工の前の旧国道十一号線（通称・観光道路）を横切ったら屋島登山道に続く。

ずっと昔、この交差点の辺りの道路は舗装していなくて、田圃が続き民家は一軒もなく、大変淋しい所であった。この旧国道の北側の路側は東西に水路が走り、二間位の小さい木造の橋が架っていた。そしてこの橋のことを人々は明神橋と呼んでいた。

この橋に何時の頃からか、娘に化けた狸が出ると言う噂がたつようになった。

一度見てみたいものと、夕方暗くなって松吉さんが出かけて行くと、噂通り娘が南の方を向いて、明神橋のたもとに立っていた。

こんな話をすると、

「その娘は美人であったんな・・・」とよく聞かれるが、暗がりの中で後ろから見たの

であるから、ハッキリと美人であったと返事ができないが、**とにかく後ろ姿は美しかった。**

狸が娘に化けることはないと思うだろうが、**私が本当に見たのだから間違いはない。**と言う。

（註）筆者が推測するところでは、狸の娘でなく人間の娘が松吉さんを待っていたのでなかろうか。

新川の狸

1) 紺の好きな牝狸

大橋前・鎌野ヨシ卫氏より聞書

「おたしが、うちのおっさん（久吉さん）と一緒にになって間もなくのことであつたけん、だいぶ前のことじゃけど・・・」

と、次のような話をしてくれた。

その日は、久吉さんが当番であつたから、夕方暗くなって家を出て、いつものとおり、家のすぐ横の松の木が沢山生えている、新川の東土手道を通って南へ行き、氏部さんの少し手前辺りまでくると、後ろから誰かがついてくるような気配がした。

振り向いて見ると紺の着物を着た可愛い娘である。観光道路（旧国道十一号線）に出て、新川橋を西に向つてもついてくる。辺りはすでに暗いので、

「あんた、何処まで行くんな・・・」と尋ねてみたが何も答えない。

「まあ、いいさ」と、観光道路から春日川の西土手を春日塩田の方へ切れ込んだ辺りで後ろを見ると、何時の間にやら掻き消すようにいなくなっていた。

久吉さんは、

「あれは、近ごろ噂になっている牝狸だろう」と言っていた。ということである。

2) 新川出水の狸

御殿・山田守廣氏より聞書

昔、大藪松太郎さんが、奥さんの実家の法事に出席するために小村（地名・オモレ）に行つて、お土産を沢山貰つて暗くなつての帰り道、新川橋の萬納駄菓子店の東側から、新川の東土手を北へ向つている時、この頃ここに出没する狸に騙された。

手に持っている筈のお土産は盗まれて食べてしまわれ、**東の空が白々とするまで、川の中を歩かされてしまった。**

朝、仕事に行く知合いがこれを見つけて、

「おおい、大藪さん、そこで何しょんな」

この声で目が覚めた大藪さんは、少し格好が悪かったのか、何事もなかったような顔をして帰って行つたと言う。

3) 饅頭をくれる狸

壇の浦・藤岡元栄氏より聞書

昔、新川の藤兵衛さんが新川の土手道を歩いていると、美しい娘が出てきて、「私についてきて・・・」と言うので、疑うこともなくついて行くと、「ご馳走をどうぞ」と言って、馬に食べさせる草を食べさせられた。又、「ご馳走をどうぞ」と言って、饅頭をだされたので、食べてみると、それは、牛の糞であつたという。

この娘は昔から新川に棲む牝狸が化けていたものだと言う。

新川鉄橋の狸

大橋前・天野和子氏より聞書

昔、旧国鉄の新川鉄橋辺りには、沢山の狸が棲んでいた。ここの狸は時々集って、鉄橋の東側の線路道を提灯行列をしていたと言う。こんな情景を、新川橋の東側の千葉のうどん屋のお爺さんが、度々見たことがあると話してくれたことがあるので、本当のことだろうと言う。残念ながら何のための提灯行列であつたかは分からなかったそうである。

御神灯の狸

この御神灯は、初め志度線湯元駅の南の佐々木食料品店の北前にあつたが、現在は大橋前不動尊堂の境内に移設されている。

1) 庵治の魚売りを化かす

大橋前・鎌野松吉氏より聞書

ずっと昔、庵治から毎日魚売りがきていた。ある日、いつになく全部売り切れてしまったので、機嫌良く近くの酒屋で好きな酒をのんで、何故か御神灯の火袋に頭を突っ込んでしまい、今度は入った頭が抜けなくなってしまった。土地の人がこれ見て、この頃御神灯の近くに棲みついた、狸に化かされたのだろうと言っていた。

2) 塩売りを化かす狸

大橋前・佐々木義治氏より聞書

明治三十八年に塩が専売になる前は、自分で塩を造り自分で売っていた。このためこの頃は、遠くは阿波にまで行商に行っていたと言う。ある日、一人の塩売りが、今日は思いもかけずよく売れたと、一杯飲んで酔って大橋前まで帰ってきたところ、どこでどうなったか分からないまま、御神灯の横に籠を置いて、火袋に頭を突っ込んで、「アア、綺麗じゃ、面白いわ・・・」と言いながら、顔を血だらけにし、脚をバタバタとさせていたと言う。

これは近頃御神灯の辺りに出る、狸に化かされた姿であつたという。

3) 夜泣きうどん屋を化かす狸

中筋・藤川シズ子氏より聞書

昔、大橋前に夜泣きうどんの屋台が、佐々木の勘さん宅の北前の、御神灯の側に毎晩出ていた。このうどん屋の屋号は『ふじや』で、木枯らしの吹く冬ともなれば『ふじや御用・・・』と長く尾を引いた売り声が寂しく聞こえたが、又、それが食欲をそそったものだった。

ある日、この屋台の親父が何と思ったのか、御神灯の火袋に頭を突っ込んで抜けなくなってしまう。バタバタとあがいているうちに、何かのはずみでスッポリ抜けた。「やれ、やれ」と思って屋台を見ると、**うどんや揚物がすっかり何者かに食われてしまっていた。**

これを見た土地の人は、

「大橋前には昔から狸がようけおるんで、化かされたんでは・・・」と言っていたという。

4) 行商人を化かす狸

御殿・山田守廣氏より聞書

昔、屋島の塩業に携わっていた人達は、出来上がった塩を讃岐は勿論遠くは阿波まで行商していた。

この頃のこと、ある屋島の塩行商人が、阿波へ出かけて塩を売りきって帰りが遅くなり、暗くなった頃屋島まで帰ってきた。

大橋前まで来た時何故か佐々木の勘さん宅の北前にある、御神灯の火袋に頭を突っ込んで夜が明けてしまった。

そこへ浜仕事に行く友達が通りかかって、

「おい、お前何しょんじゃ」

「面白いノゾキが出来よんじゃ、お前も見てみ」

これはまさしく、**大橋前に棲む狸に化かされた**行商人の姿であった。

(註) ノゾキとは、昔、神社や寺の夏祭り秋祭りに店を出していた、俄かごしらの見せ物のこと。ノゾキ代金を払って、物語の絵が次々と転回するにつれて、店主が情景を説明するのを、レンズを通してその絵を見る。レンズの付いたノゾキ窓は十五個位あったと思う。子供の頃、代金を払わずのぞいていると、店主に長い竹で叩かれたものである。

浦生の狸

中筋・藤川 巖氏より聞書

だいぶ前のことになるが、散髪にきた松岡の善はんから聞いた話である、と言いながら次のような話をしてくれた。(藤川さんは理髪店主)

これは、まだ屋島一周道路が舗装されていなかったと言うから、かなり古い時代の頃、『善はん』が知り合いの婚礼によばれて、沢山の土産物を貰って我が家の長崎の鼻

に帰る時、浦生の浜辺辺りにきた頃は、もう暗くなっていた。

坂を登って鼻歌を歌いながら良い機嫌で、浦生と長崎の鼻の中程にさしかかった頃、左側の海から鰯網をひく威勢のよい漁師の声が、相当距離があるのに聞こえる。暗い夜であるし、道から海までは断崖であるのに何故か沖の鰯網の船が見える。船の胴の間には鰯が跳ねているのも見える。

「おおい、若い衆少し鰯を分けてくれ」

「よっしゃ、まっちゃりまい」と若い衆が崖を登ってきて、袋に一杯入れてくれた。

「ありがとう」と言って、横を見るとさっき置いた筈の土産物がない。

「さては、この頃噂の狸の仕業か」と、

翌日現場へ行ってみると、一面に食べ散らかした残飯があった。

饅頭をくわす狸

浦生・新田庄市氏より聞書

長崎の鼻には、昔、四軒の家があった。この内の一軒に松岡善太郎さんが住んでいた。

昔は屋島には狸があちらこちらに棲んでいたもので、沢山の人が狸を掴まえて飼っていたが、善太郎さんも何時も狸を飼って可愛がっていた。

ある日、善太郎さんが浦生からの坂道を登って我が家への帰り道、坂を過ぎて暫く行った所で美しい娘に出会った。

これは狸が化けた娘だなと思ったが、どうすることもできず化かされて、山道を徘徊してなかなか家へ帰れず、気が付いたらガンゼン堂の中へ入り、さっき娘がくれた饅頭を食べていた。この饅頭がなんと牛の糞であったと言う。

（註）ガンゼン堂とは、死者を火葬にする所。

太鼓橋の牝狸

中筋・藤川 巖氏より聞書

昔、屋島の若者が、仕事を終えて帰宅途中先輩同僚に誘われて、古高松のバァ『いこい』に立ち寄った。元来酒に弱い若者は、暫く付き合いをしただけで、『いこい』を出た。

東照権現さんの参道を、北へ歩いて太鼓橋の辺りへ来かかった時、美しい女性が現れて、

「今夜、私の家へ来て、一緒にお風呂に入りませんか」と誘われた。

これが娘に化けた狸と知らない若者は誘惑にのって、一風呂お相伴することにした。やがて若者は参道脇の松の枝に、着物や褌をひっかけて、真っ裸になり横の相引川に飛び込んだ。

ようやく朝になって、東の八栗さんの山が白み始める頃、ここを通りかかった友達

が、

「おい、川の中で何しょんじゃ」

「おお・・・、お前か・・・、ええ風呂じゃ一緒に入らんか」

「早う上がれ、風引くぞ・・・」

それでも若者はスイスイと川の中で泳いでいたと言う。

神社裏の狸

御殿・山田守廣氏より聞書

八坂神社の裏に、大力丸に乗り組む船乗りがいた。この家の表の角に足曲りの狸がいて、時々人間を騙していたと言う。

足曲りというから、事故で怪我をしたものか、人間に怪我をさされたので、人間に悪さをするのか、とにかく足曲りであった。

足まがりの狸

中筋・藤川 厳氏より聞書

昔、志度線の湊元駅が新川鉄橋の西にあった頃、この駅辺りに足まがりの狸が出ていた。

足まがりと言うのは、あまりにも馴れ親しんで、人間が歩いていると足にジャレついて邪魔になることで、方言で言えば『まがる』と言うことである。

ある日、柔道の達人で御前試合に出場したことがある、屋島郵便局長の親戚の柏原某氏が、高松での用事を終えてこの駅に下りて、川の中の板橋を渡ろうと歩きはじめると、足にジャレつくものがあって歩きにくい。

「ははぁ、これはこの辺りに出没する『足まがりの狸』だな」と呼吸を計って、思い切り蹴飛ばした。

するとどうだろう、狸かと思ったら松の根っこを蹴っていた。勿論怪我をしたが、その程度は公表されなかったので分からない。

第十五番塩田の狸

浜北・島 勇氏より聞書

昔、島さんが子供の頃、島さんのお父さんは屋島の第十五番塩田に勤務していた。このため島さんも、時々塩田へ行くことがあった。

ある日、用事があったので塩田へ行き、ついでに遊んだので遅くなって家路についた。

暗い塩田の土手道を北に向い、堀のあるところから右に方向を変えて、塩釜神社に向って歩いていると、暗い筈の土手道が白っぽく、ぼんやりと光って見える。道がよく見えるので都合が良いと、そのまま進んで行くと、白っぽい道が突然真っ暗になり、その右手に白っぽい道が見えてきた。

さっきは左の道であったはずだと思ったが、ままよと、右の道を歩きはじめると、**突然浜の水路に落ち込んだ。**

この辺りには、狸が出て人を化かすと聞いていたので、子供ながらに気をつけていたつもりであったが、**見事に騙されてしまった。**

第十九番塩田の狸

浜中・橋本義國氏より聞書

昔、屋島西町に塩田があった頃、第十九番の塩田の土手道に、娘に化けた狸が出るとの噂がたった。この**娘狸を見たのは何人もいる**と言うので、本当に出ていたのであろう。

（註）第十九番の塩田とは、現在の下水处理場の南のテニスコート辺りにあった塩田のこと。

一本松の狸

三崎・明石栄一氏より聞書

少し前までは、琴電志度線の古高松駅辺りを、土地の人は一本松と呼んでいた。

その頃、駅の南側の国道十一号線の中央辺りに八坪位の土地があって、ここに小さい祠があり大きい松が一本あった。

この松の木の根元に狸が棲んでいて、**夜遅くなってここを通る人に、砂を投げつけていた**という。

新池の狸

新馬場・池内コナミ氏より聞書

屋島神社（通称・東照権現さん）の参道を登りつめた辺りの、右手の小高い所にある池を新池と言う。

この辺りには、昔から人間を誑かす狸が棲んでいた。

ある日、近くの山地金一さんが用事があって、この池の土手道を通っていたところ、**「狸に化かされた」**と言って慌てて帰ってきたかと思うと、布団を敷いて寝てしまったという。余程のことがあったのか、暫く仕事もしないで寝ていたという。

金一さんは、その後元気で軍隊に入隊したが、残念なことに戦死したという。

蛇の目傘をさす狸

中筋・藤川 巖氏より聞書

昔、朝鷹酒造会社が隆盛を極めていた頃は、屋島郵便局のすぐ東側を北へ向うと会社の入口があったそうである。

この郵便局の前を東へ行った角辺りには、酒造会社の大きい酒樽の干場があって、ここは夜暗くなると、雨が降る降らないに関係なく、**蛇の目傘をさして美女に化けた狸が立っていた**と言う。

この狸が化けた美女は、いくら暗くても不思議なことに、着物の柄がハッキリ見え
たし蛇の目の模様もハッキリ見えたという。

この狸は人間に悪戯することがなく、この美女狸を見た人が多いことからみれば、
自分の美女ぶりを見てほしかったのかもわからない。

狸 伝 説（２）

中筋の狸

１）砂投げ狸

中筋・藤川シズ子氏より聞書

シズ子さんが花も恥じらう十八才の春、（今は八十二才）宮前で芝居を見ての帰りに、中筋の西山さんの裏を通りかかると、かねて**噂の狸に砂をぶつけられた**と言う。

２）砂投げの噂

地藏寺住職・天野龍鳳師より聞書

小学校四、五年生の頃であったから、大正十一年か十二年頃、寺の広島釜が壊れて下の風呂屋へ行く途中にあった屋島醤油社の辺りは、昔、鬱蒼とした竹藪であった。

この竹藪に砂をかける狸がいたそうである。と言うのは、住職は一度も砂をかけられた経験がなかったからである。

砂をかけられた時は、恐ろしがらず平気な顔をしていないと、**狸が面白がっていくらでも砂をかけ続けると**、大人達が言っていたそうである。

おかんの池の狸

大橋前・川田忠義氏より聞書

昔、東山地の磯部さんの上に池があった。この池の周囲は笹が生えていて、人々は『おかんの池』と呼んでいた。

池田嘉次郎さんが、夜おそくなって、この池の土手道を通っていると、美人の娘が出てきて、

「こっちへ来まい、こっちへ来まい」としきりに呼ぶ。

「そんなところへは行かん」と言うと、突然暗がりから出てきた牝狸に手を引っ張られて、横の蓮池に投げ込まれた。

嘉次郎さんが、蓮池の棒杭に取縋って、

「助けてくれ、助けてくれ」と叫んでいるところへ、知合いの谷口長一さんが通りかかって、助けたと言う。

これは、助けた長一さんからの又聞きの話であるから**実話だそうである**。

東山地の狸

新馬場・大西シゲノ氏より聞書

昔、山の上の佐々木金五郎さんが、婚礼に招かれて沢山の土産を頂戴して家に帰る途中、狸が出てきて土産を盗られそうになったので、**クンズホグレッツの大喧嘩**になった。

さすが体を鍛えた金五郎さんは、いかに狸が化かそうとしても勝利の凱歌をあげ、

無事土産を家へ持って帰ったと言う。

また、その喧嘩の様子を逐一見ていた人がおったと言う。その人は、本当の人間であったか、狸が化けた人間であったかは、さだかでない。

新馬場の池の狸

新馬場・大西シゲノ氏より聞書

今はもう無くなったが、昔、大宮八幡宮の御旅所を少し上った西に、小さい池があった。

この池の竹藪に沢山の狸が棲んでいたそうである。

ここの狸は人間を騙したことはないそうである。

新馬場の馬場池の狸

新馬場・大西シゲノ氏より聞書

昔、大宮八幡宮の参道の東にある馬場池は、竹藪の生い茂った池で、この池の土手道を、大提灯をぶらさげて歩く狸がいたそうである。

この様子を見た人がいたと言うから本当の話であろう。

新池の狸

新馬場・平田謙三郎氏より聞書

昔は屋島のあちこちに、沢山の狸が棲んでいた。

屋島神社の参道の東側にある、新池を少し下がった所の西側の水路にも狸はいた。この狸は夜遅くなって通る人に、砂をぶつけていたと言う。

湯元塩田の狸

壇の浦・藤岡元栄氏より聞書

昔、入り浜式塩田があった頃、塩田で働く人達はみんな交替制の勤務であった。

その頃ある従業員が、交替のため暗くなって家を出て、浜の明神さんの所に来た時、娘狸に化かされたと言う。

昔から牝狸が藻葉をかぶると、娘に化けると聞いていたが、その様子を見ながら化かされたと言う。その化かされ具合は、聞いていないのでわからない。

お染狸と八太郎狸

壇の浦・藤岡元栄氏より聞書

昔々、可愛いお染狸は、安徳さん（壇浦神社）に棲んでいた。又、八太郎狸は、近くのソバクラさんに棲んでいた。

お染狸は人間にたいして特別の神通力がなかったので、お供物が上がることが少なかったし、悪戯をして人間が持っている食物を、化かして盗むこともしなかったので、何時もお腹をすかしていた。

八太郎狸は御願いすると、出物や鼻垂れを直していたので、お礼に大好きな小豆飯

や油揚げのお供物が上がるので、お腹をすかすことがなかった。そして、二匹は相思相愛の仲であったから、夕方暗くなると、お染狸に八太郎狸がお供物の小豆飯や油揚げを、届ける姿をよく見たそうである。

ある時、八太郎狸にあまりお供えが上がりなかった頃のある日、木村のご隠居さんが婚礼によばれて、沢山のお土産を貰い、酔いも手伝ってか良い機嫌で鼻歌を歌いながら、安徳さんの側の水路辺りまで帰ってきたところ、狸に化かされて土産を全部盗まれてしまった。

翌日になって見ると安徳さんの境内に、食べ滓等が散らかっていたという。**八太郎狸が盗んでお染狸に持って行ったのだろう**と、皆が囁きあったということである。

石場の狸

石場・高橋 都氏より聞書

石場のある男の人が、婚礼のお土産を沢山貰って、夜遅く小林さんの所の四辻を下におりて、我が家に向かってしていると、知らぬ間にお土産は全部盗まれて、**気がついたら浜辺で寝ていた**と言う。

これは狸の悪戯であったと人々は噂していたが、この辺りで油揚げを盗まれることは、常のことであつたらしい。

又、ある時、都さんの家の上の谷さんが、昼でも危ない細道を夜中に自転車で通って、**気がついたら小林さんの下のガラバで寝ていた**と言う。

これも石場の狸の悪戯であったという。考えてみるに、石場の狸は、物を盗んだうえに、被害者を眠らせるというから、かなりの悪戯狸であつたらしい。

本家裏の狸

御殿・山田守廣氏より聞書

石場の分家の藤岡九市郎さんが、本家の藤岡与三郎さんから法事に招待された。たらふくご馳走になり、沢山のお土産を頂戴して帰る時、本家の裏の竹藪の側を通ったら、手に重い筈のお土産がない。

これは、近頃この辺りに出る**狸の悪戯であった**と言う。

飛石の狸

御殿・山田守廣氏より聞書

昔、屋島一周道路がなかった頃、浦生と浜北の境は断崖絶壁で、すぐ海が迫っていたから、浦生の人や浜北から南の人は潮の干潮時をねらって、海岸の岩を渡って往来していた。だから人々はこの辺りを飛石と言っていた。

このような状況であつたから、帰りが遅くなって潮が満ちてくれば、一晚宿泊しなければならない程、浦生は不便な所であつた。

この飛石の崖の上に狸が棲んでいて、**人が岩を渡っておると、上から砂を投げかけた**ということである。

醤油会社下の牝狸

浜中・観寺政子氏より聞書

政子さんのお父さんが屋島醤油会社に勤めていた頃、と言うからかなり前のこと、醤油の仕込みの作業を終って、夜遅く帰途について水路の横を通っている時、水路の中で何か洗っているような音がする。

辺りは暗くなっているし、こんな遅くに誰だろう『小豆洗い』かと覗いて見ると、美しいどこかの若奥さんが何か洗っている様子。

「姉さん、こんな遅くよう精が出ますの・・・」

「はい、私方の姑は口喧しく、難しい人なので、夜になって小豆を洗っています」

「それは、それは、大変なことですな・・・」

これはてっきり、最近この辺りに出ると言われておる、牝狸が化けた若奥さんだろう。それならば、掴まえて家に連れて帰ろうと、後ろの腰帯をしっかりと掴んだ。

すると若奥さんが、

「私、急におシッコが出たくなったので、あっちへ向いて頂戴」 おシッコをしているところを見るのは、男の汚券にかかわると、後ろへ向いたトタンに持つ手がゆるんで、**狸に逃げられてしまった。**

蛇 伝 説

白 蛇

大橋前・高杉イサ工氏より聞書

高杉さんは、元屋島小学校の教師であったから、大橋前の民話・昔話については数多く知っているだろうと訪ねていった。

「私はよそから嫁にきたんで、あまり知りませんよ……。そういえば、うちの裏の庭の太い木にホコラがあって、白蛇がいたんです」

これは面白い取材ができると喜んで、

「先生、その白蛇は人間に化けるとか、悪戯をしたりするんですか」

「何いよんかいの、蛇が化けたりするもんな……」

鋭い面を一本くらった感じ、さすが元先生である。

三軒古浜の大蛇（１）

大橋前・佐々木義治氏より聞書

昔々と言う程遠くない大正の末期頃、八坂神社の御旅所の西にあった三軒の浜に大蛇がおった。

朝早く浜に行くと、浜の西の堤防から一尺位の幅でクネクネと浜の中を大蛇が通った跡があった。誰かがいたずらにアテコを引っ張ったのではと言う大人もいたが、朝早く友達と浜へ行ってみると、確かに大蛇が通ったような跡があった。

（註）浜……塩田

アテコ……小麦藁で作った三角形の製塩用具

ゴオラの大蛇

大橋前・江浪雪雄氏より聞書

昔、屋島の壇の浦のゴオラに大蛇がおった。

ある日、村人が子供の薬にするために、ゴオラへ薬草取りに行ったところ、四斗樽の太さもある大蛇が寝ていたので、腰を抜かさんばかりにびっくりして飛んで帰った。

しかし、この大蛇は人間に悪戯するでもなく、ただ毎日長々と寝そべって、日向ぼっこをしているだけで、夏の暑い日照りが続いた時にはゴオラに水が無くなるので、庵治まで水を飲みに行ったということで、このことは白波を蹴立てて庵治へ向かう大蛇を見たと言う人が何人もおるので、確かなことだそう。

江浪氏は、これは祖母ヨシさんから聞いた話であると言いながら、自分が子供の時これを確かめるため、庵治の友達とゴオラへ行ったことがあるが、大蛇がいても不思議ではない所であったそうだ。

（註）ゴオラとは、山の崖縁の木の生えていない石ころだらけの場所。

地蔵寺の大蛇

大橋前・鎌野松吉氏より聞書

「屋島には大蛇が棲んどるけん、気つけよ・・・」と、子供の頃からよく親父に言われていた。

ある夏のこと、地蔵寺の裏で薪木を採ってショイコに縛りつけ、地蔵寺の入口付近まで帰ってきたところ、一升ビン位の太さがある長い蛇がクネクネと西の畑の方へはっていくのを見た。

「屋島は山が深いけん、親父が言うた通りの大きな蛇がおるもんじゃの」と、思いながら蛇が入っていった西側の畑に目をやると、一斗樽程の太さの蛇が畑の溝をはって行くのが見えた。

びっくりしたのなんの、腰が抜けてしまってショイコを投げ捨てて、這って家へ辿りついたことがある。

地蔵寺に大蛇が棲んでおると言うことは聞いたことがないので、これは山から下りてきたのであろう。

「天野さんも山へ行く時は、気つけまいよ」と警告を頂戴した。

三軒古浜の大蛇（２）

大橋前・鎌野松吉氏より聞書

浜北から帰る途中、八坂神社のお旅所の辺りへさしかかると、大谷川に架る五軒屋の石橋の上を大きな松の木が横たわっている。何でだろうと近寄って見ると、一斗樽程もある太い長い蛇が、三軒の浜へ向かって這い下りているところであった。

頭は浜に着いているのに、尻尾はまだ石橋のだいぶ東にある。

これが最近噂になっている、三軒の浜の大蛇かとおもった。

「鎌野さん、そんな太い蛇はおらんでしょうが」

「いや、俺がこの目で見たんじゃけん間違いない」

筆者はこの話を聞いた時本当だろうかと思ったが、見た本人が言うのだから本当の話であろう。

大橋前地区の佐々木義治氏もこの噂は知っているという。

屋島登山道の大蛇

噂により聞書

この話は私達一家が、昭和二十年七月四日の米軍による高松空襲のため罹災者となり、大橋前の三浦末吉さんのご好意により屋島へ引っ越しをしてきた頃であるから、昭和二十二、二十三年頃のことであったと思う。

ある農家の人が屋島山から雑木を切り出して、屋島小学校の上の柑橘園がとぎれた辺りにきた時、疲れたので一服しようと荷をおろして、松の木にもたれたところ、何とはなしにその松の木が動くような感じがした。何だろうとよく見ると、**一升ビン位の太さの蛇が、松の木の枝からぶら下がっていた**のにもたれていた。

「**そうだ、ここには松の木が無かった筈だ**」と思ったトタンに気絶してしまったと言う話。

その後、その農家の人がどうなったかは聞いていないが、屋島山は深いし谷もあるので、大蛇がいても不思議はないと、それからというものは、極度に蛇嫌いの私はこの辺りを歩くことを遠慮するようになった。

蛇 娘

浦生・新田庄市氏より聞書

長崎の鼻の洞窟は豊島石の採掘場であったが、昔はこの**洞窟の奥に大蛇が棲んでいた**。この大蛇は人間を化すので、用事のある人は明るいうちにここを通らなければならなかった。

ある日、長崎の鼻に住んでいる松岡の善太郎さんが、早く用事を済ませようと、明るい時にここを通りかかると、美しい娘が現れた。この辺りのことは何でも知っている善太郎さんであるから、これは大蛇が出てきたかと近寄って、

「**娘さん、あんたは上手く化けているつもりだろうが、着物の後から尻尾が見えとるぜ。**

どうせ化けるんなら、上手く化けないかんの・・・」

「**ほんなら、今度通った時教えていた・・・」**

暫くして、又、ここを通らなければならない用事ができたので、蛇娘がいるかと期待しながら通ると、果たして蛇娘が出てきた。

「**おっさん、この前の約束じゃけん、化け方を教えていた・・・」**

善太郎さんは、このことを予期して、女物の派手な着物を持ってきていたので、

「**お前、ちょっと向うむいとけ**」と言って急いで女物の着物と着替えた。

「**よっしゃ、見てみ**」

「**おっさんは、上手いの・・・」**

「**ところで、お前が一番好かんもんは何じゃ**」

「**うちは、煙草のヤニが一番好かんのじゃ**」

「**おっさんは、何が好かんのな**」

「**おらはの、金が好かんのじゃ**」

こんなやりとりがあって浦生に入り、浦生の人達に頼んで浦生中の煙草のヤニを集めて持って帰り、大蛇が棲む洞窟の穴に一杯詰め込んだ。大蛇はこのために体中が腫れ上がり、寝付いてしまったが、暫くしてようやく少し良くなったので、**沢山の金を持**

って善太郎さんの家へやってきて、

「好かん言うとった金を持ってきたぞ」と言いながら家の中へ金を投げ込んだ。善太郎さんは、

「もう、止めてくれ、金で重いけん、止めてくれ」と言いながら、ニコニコしながら金の山に埋もった。と言う。

この後善太郎さんは、金に困らなかったかどうかはわからないが、大蛇はもう出なくなったと言う。

妖怪伝説

蛸見池

屋島園・平尾延子氏より聞書

昔、屋島が島であった頃、藤目に小さい池があった。

この池の堤防に、満月の晩になると蛸が海からあがってきて、小手をかざして四方を眺めていたと言う。この様子を見た村人は、誰言うことなくこの池を蛸見池と言うようになったと言う。

古老に聞くと、

「年寄り蛸が昔の源平合戦の話をしていたんか、若い蛸が近所の娘蛸の噂話をしていたんか、わしは知らん」

ピタピタの怪

大橋前・谷口辰男氏より聞書

琴電志度線の新川鉄橋を東へ渡って、元三軒の橋までの土手は、昔は松の木が生い茂って昼でも大変淋しい所であった。

この土手を夜更けて通ると、後からピタピタと音をたてながら誰かがついてくる。立ち止まればピタピタは止む。歩きだすと又ピタピタと音がして誰かがついてくる。とにかく、後を振り返ってはいけないことになっているので、誰もその正体を見た者はいない。

ササギ洗い

大橋前佐々木義治氏と鎌野松吉氏の会話より聞書

何時であったか、大橋前源平会の新年宴会の席上で、佐々木さんと鎌野さんが話しているのを聞いた話。

佐々木「まつよっさん、昔、お前んとこの横の溝で、夜中になったら何か洗っとるような音がするいう噂がたったの・・・」

鎌野「おお・・・、おらが若い頃、そんな話があったの・・・」

佐々木「あれは、何の音じゃったんかいの・・・」

鎌野「あの音は狸がササギを洗ろとった音じゃ言う、大人もおったの」

佐々木「ほんなら、あんな夜中にササギを洗う人間はおらんけん、狸か貉が砂でも洗うとったんかいの・・・」

鎌野「そんな、狸や貉が砂を洗うじゃいうことあるもんか、うちの東手に生えとった笹が風で鳴とったんじゃ」

佐々木「おらは、何かがおったと思うぞ」

何時までたっても話が噛み合わず、結論がでないのでこの位にしておくことにする。
ササギはササゲの方言

（註）妖怪漫画家の水木しげる氏は、東北地方には昔から『座敷わらし』『河童』『小豆洗い』等色々な魔物や怪物が沢山いたという。

私は一度も出会ったことがないので、いたと言うのであればいたであろうし、いなかったと言うのであればいなかったのであろう。しかし、いたと言う方が夢があって楽しいと思うがどうであろう。

魔の道

大橋前・飛倉堅二氏より聞書

飛倉堅二氏が十五才の頃は、大阪の家が空襲に遭遇して、母の実家がある川島町に住んでいた。

その頃は、まだ何処の地域でも助け合いの風習があって、冠婚葬祭等は必ず近所の人達が手伝いするのが常であった。

この頃、堅二さんのすぐ近くの家で、事情があって離婚して実家に帰ったが、何故か毎日暗い部屋に閉じ籠り、何かしら物おもいにふけている青い顔色をした娘がいた。

ある日この娘が突然いなくなる変事が起きた。

この時、堅二さんの父が抜き差しならない用事があったので、風習に従って父に替わって搜索係りの一員となって参加したことがあった。

搜索係りの世話人頭は彼の叔父で、

「こんな場合は、何人かグループになって、魔の道を通して搜索するものである」という注意が叔父からあって、近所の人達と初めに由良山に登った。提灯を手に手に持った人達は、「戻せ・・・、返せ・・・」と叫びながらくまなく山の中を搜索した。高く低く暗い夜空に響く呼び声は、人々の哀愁をさそったという。山では見つけることができなかったので、搜索区域を広めるために川島町を出発した。春日川の左岸の家々に立ち寄りながら、娘の消息を尋ねて北へ進む。

しばらくすると川の中を横切って右岸に渡り、又、家々に立ち寄って進む。左岸右岸と何回も繰り返しながら新田町に入り、暗い中を魔の道の道標となると言われている、屋島の天狗松を目指してタダノ鉄工の横の溝に沿って進む。屋島地区に入っては何処を通ったか忘れたが、屋島を出て福岡町を過ぎ西浜町で探して、高松の石清水八幡宮へ行くと、昨日そのように見える娘が絵馬堂にいたとの情報を得たので、翌日再び石清水八幡宮に訪れると、果たして憔悴しきった姿で発見された。

家に帰った後も誰に会うこともなく静かにくらしていたが、間もなく亡くなった。

なんと悲しい結末でなかろうか。

（註）このように、突然理由もなく家出するのは、昔から『神隠し』とか、『天狗にさらわれる』と言われているものだろう。

大橋前地区にも、『魔の道』はある筈であると思うがどうであろう。

高 坊 主

中筋・藤川 巖氏より聞書

だいぶ前のことになるが、少し高台にある旧屋島醤油会社の近くの西山さん宅辺りで高坊主が出るという噂がたったことがある。

何処に出る高坊主も同じであるが、ここの高坊主も、見上げれば見上げる程高くなって、見た人を見下ろしていたという。

これは何人も見た人がおるので、本当に出ていたのであろう。

北石場の高坊主

北石場・藤岡 喬氏より聞書

昔々、北石場の藤岡 喬氏の裏の藤岡氏所有の藤岡堀池の辺りを、夜遅く通ると高坊主が出て、地域の人を驚かしていた。これを心配した喬氏の先祖が、池の南東の堤防上に、小さい後背舟型不動明王石像を建立して供養したところ、それ以後は出なくなったと言う。

魔 物 道

知らない人より聞書

高台にある旧屋島醤油会社から南へ、又、東へ細い通路がいりくんでいて、この辺りは一回行った位では判りにくい所である。

何時の頃からか、この中の一本の道は魔物道であると言いだしたことがある。

何処の地区にもこの種の道はあるらしいが、これは不幸な事件があった家の前の通りを言うらしい、と言う。

魔 物 通 り

中筋・藤川シズ子氏より聞書

八坂神社の東の高杉果物店のすぐ東側を、地藏寺に向ってダラダラの坂道がある。この道をしばらく行くと、右側に山本工務店がある辺りを魔物通りと言うらしい。

これは、昔この辺りを夜中に通った人が、あまりガヤガヤと騒ぐような賑やかなざわめきが聞こえてくるのでよく見ると、地藏寺の方から七福神が下りてくるのが見えた。これから誰言うことなく、この辺りを魔物通りと言うようになった、ということである。七福神を何人も見ているので、確かなことであるそう。

高 坊 主

御殿・山田守廣氏より聞書

昔、斧神社（木割権現とも言う）が八坂神社の御旅所にあった頃、ここに、**白い着物を着た高坊主**が出るという噂がたったことがある。その頃、この辺りには、毎晩夜泣きうどんの屋台が来ていたが、ある時チョットしたスキにうどんや揚げ物などを、全部食われたことがあるので、高坊主が白い着物を着ているのは不思議でないが、もしやあれは狸でなかっただろうかとも言われている。

高 坊 主

御殿・山田守廣氏より聞書

元屋島醤油会社の近所の西山さん宅の裏に、**大きい高坊主が出た**との噂がたったことがある。

ここの高坊主は何人も見たという人がおるので、この辺りは皆恐ろしがつて、夜は通らなくなったという。

あれは狸が化けて出るのだ言う人もいたが、本当は何だったのだろうか。

三軒の落し橋の小豆洗い

御殿・山田守廣氏より聞書

通称三軒の橋に、昔、小豆洗いがおった。小豆洗いというのは、夜遅くその場所を通ると、**小豆を洗うような音をさせる**ので、このように言われている。狸の仕業でないだろうかとも言う人がいた。

（註）落し橋とは、昔この辺りは塩田があって塩や吠を搬出するために、この辺りまで船が上ってきていたので、その船が出入り出来るように、橋の両端は石造りの橋にし真ん中を板をわたし、船が来た時は板をずらして出入りが便利のように作ってある橋のことである。

ナマメ筋（魔物通り）

中筋・三野ツタ卫氏より聞書

八坂神社の東の高杉果物店の東側を、地藏寺に向って坂道を登ると、通称三軒屋と言われていた所に、昔、麴屋があった。この麴屋の裏に倉があって、この辺りは木が生い茂って昼でも淋しいところであった。人々はこの辺りをナマメ筋と言っていたが子供は特に怖がっていた。

このナマメ筋に猫を捨てると、**何故か二度と家には帰ってこなかった**と言う。ナマメは、ナワメと言っていたかも知れない、随分前のことだから忘れたそうである。

音のする坂道

中筋・三野ツタ卫氏より聞書

藤川理髪店の前の坂道を登った所は、**夜中に通るとチンチンチンと音が聞こえた**と言う。何故だかわからないそうである。

高 坊 主

中筋・三野ツタ卫氏より聞書

昔、屋島醤油会社があった付近に、**高坊主が出る**との噂がたったことがある。

小豆洗い

中筋・三野ツタ卫氏より聞書

高杉果物店の東側を地藏寺に向って登り、ツタ卫さんの家の東の大谷川に、**昔、小豆洗いがいた**と言う。

現在大谷川は、降雨量が多い時のみにしか流れがないが、その頃は、水量が多く何時も流れていたと言う。

飛石の怪

浜中・青木正彦氏より聞書

昔、浜北と浦生の境を飛石（地名）と言っていた。

この頃、浜北と浦生は、干潮の時、飛石をつたって往来していたが、満潮でここを通れない時は、ひる尚暗い細く気持ちの悪い山道を、松の木をつたいながら往来していた。

ある時ここを馬を通そうとしたところ、転倒して崖下に転落して死んだという。

それから、この谷を馬ヶ谷と言うようになったそうである。

この頂上に縦長の石が建てられていて、その時死んだ馬の墓だと言う。

高 坊 主

浜中・橋本義國氏より聞書

昔、屋島醤油会社の近くの西山さん宅の裏に、大きいモクの木があって、そこに**高坊主が出る**との噂がたった。

この辺りは樹木が生え、一面に竹藪があったので、恐ろしがって皆がこのように言っていたのであろう。

琴電志度線屋島駅の怪

新馬場・大西シゲノ氏より聞書

昭和三年頃のこと、大宮八幡宮の秋祭に大坂の姉が来ると言うので、昔、東条産婦人科病院があった所から五米位の側にあった、屋島駅まで提灯をつけて迎えに行った。

すると突然、**何かに憑かれたように、側のヘドロで一杯の水路に入って歩いていた**。一緒に行った姉に声をかけられたので我に返ったが、新しく買って貰った下駄が、泥まみれになったのが、悔しかった。

これは狸の悪戯だったのかもしれない。

壇の浦の高坊主

壇の浦・藤岡元栄氏より聞書

かなり前のことになるが、壇の浦の豆腐屋の前に、**高坊主が出る**という噂があったことがある。

ある夜、世間の人皆が寝静まった真夜中に、パタパタと大きい音が家へ近づいてきた。豆腐屋のおばさんが目を醒まして、表の戸を開けると、目の前に暗い空から降ってきたように、太い物が地面に立っていた。

びっくりしてよく見れば足のようなものである。

「あんた、あんた・・・、化け物が出た・・・」

「そんなことがあるもんか・・・、裏も見てみ・・・」

恐る恐る裏の戸を開けて見ると、表と同じ物が目の前にある。主人も起きてきて夫婦が表に出て我が家を見上げると、暗い夜空に白い衣を着た高坊主が家を跨いで突っ立って、壇の浦の海を眺めていた。

これを見たトタンに**豆腐屋の夫婦は気絶してしまった**。

またいつかの夏の日の真夜中に、豆腐屋の裏の堀で、誰かがザバザバと大きな音をさせながら、水浴びしているようなので、豆腐屋の夫婦が出て見ると、この前に家を跨いでいた高坊主が、暑さに耐えられず、裸になって水浴びしていた。

今度もびっくりはしたが、**二回目なので気絶はしなかった**。

近所の人々はこの現象を、狸の仕業ではないだろうかとも言っていた。

ナマメ筋

壇の浦・藤岡元栄氏より聞書

ナマメ筋とは、何処の地区にでも一本はある魔物道のことで、壇の浦にも昔細い一本のナマメ筋があった。

ある晩遅く、ここを自転車で通りかかった男の人の前に、美しい娘が現れて、

「おじさん、牡蠣船へ一緒に行きませんか」と誘われた。

「そんなところは行かん」と断り、更に進んで道の端で立小便をしていると、ザバザバと音が聞こえてくる。道の端の筈だが、

「さて・・・、ここは何処だろう」と気がついてみると、**何時の間にか海岸に出ていて、波打ち際で小便をしていた**。

こんなことがよくあったので、地元の人達がお坊さんに御願ひして祈祷をしてもらったところ、それ以後は出なくなったということである。

（註）牡蠣船とは、牡蠣が美味しい時期になると、料理人や仲居さんが乗り込んで広島から船でやってきて、船内で牡蠣料理や酒等を提供していた料亭のようなもの。高松では戦前まで、仙場川に架かる新橋の北側の両岸に、二隻の船がきていた。

山の神さんの下の怪

石場・高橋 都氏より聞書

昔、屋島一円では、下草刈りや、コクバ掻きの鑑札を買って燃料を作るために、山に出かけて行ったものである。

石場地区でも同じように山へ行っていたが、薄暗くなって山の神さん下を通ると、誰かが立っているような気がした。

又、本当に若い娘が立っている時もあった。

この現象は**何人も経験しているので嘘ではない**と言う。

（註）これは、何処の地方にでもある、妖怪の仕業でなかったらどうか。

石場の小豆洗い

石場・高橋 都氏より聞書

都さんが小学校の三、四年生の頃、用事があって、お婆さんと竹藪が生い茂っている細道を通っていると、**横の水路からザラザラ**という音が聞こえてくる。

「お婆さん、あの音はなんな・・・」

「おお・・・、あれはの、小豆洗いが小豆を洗うとんじゃ、お前もここを通る時は気をつけないかで・・・」

このことがあってから、なるべく通らないことにしていたが、どうしても通らなければならない時は、何時も早足で通り過ぎていたと言う。

ここで**この音を聞いた者は、何人もいる**と言う。

雷 二 題

その1

石場のお婆さんの話

孫「お婆さん、なんか話して・・・」

婆「そんなら、雷の話でもしてやろうかの・・・。昔々、屋島村の石場部落の金持ちの家の庭の大きな木に、雷さんがあまったんじゃと」

孫「それでどしたんな」

婆「まあ、だまって聞け。そんでの、・・・あまって尻餅をついたんで、雷さんは慌てて、太い木を登って天へ帰って行ったんじゃと」

孫「そんで」

婆「今でも、あそこの家の大きい木には、雷さんの爪跡があるじゃろが」

孫「雷さんは、電気じゃと学校で習ったで・・・」

婆「アホ言うな、雷さんは電気がまだ無かった時からおるんじゃ」

その2

中筋・山地のお爺さんの話

昔々、屋島西町が西潟元村といわれていた頃、氏神様である天王さんの太い大きいモクの木に、雷さんがあまった。

大きい音がしたので近所の人々が、こんな天気が良いのに何事だろうと、急いで天王さんへ行ってみると、**小さい雷さんの子供**が天へ帰ろうとして、モクの木に抱き付いている。これは珍しいものを見つけたと、掴まえようとしたが、なかなか掴まえられない。たまたまここを通りかかった人が手伝って箱の中へ入れて、皆を呼びに行っている間に、細いモクの木をつたって天へ帰ってしまった。

（註）八坂神社は、牛頭天王を祀っていたので、昔は天王さんと呼んでいた。落ちたことを方言で、「**あまった**」と言う。

屋島居住の方が語った他地区の伝説

陶山峠の牝狸

大橋前・江浪雪雄氏より聞書

昔々、牟礼村の大町から役戸へ抜ける陶山峠に、いたずら好きの牝狸がおった。

ある日、村の若い衆が砂糖絞めの仕事から帰る途中で、すっかり日が暮れてしまったので、少しは遠くなるが南回りの麓の道にしようか、淋しくても峠の近道にしようかと迷った末、少しでも早く家に帰ろうと、峠越えをすることにした。

新月が淡くこぼれる薄暗い峠の道を、少し東へ下った池の辺りで美しい娘に出会った。

「山道を歩いたんで、足が痛うてもう歩けんから、手を引いていた」と言う。

「よっしゃ・・・」

若い衆は前々から聞いていた狸が出たなと気づいて、こいつを連れて帰って狸汁にでもしようと娘の手をしっかりと握って峠道を下りて行った。

「もし・・・、あんまり強う握るんで手が痛うていかんけん、手を握り替えていた」

若い衆は握り替えた手を、しっかりと掴んで村まで帰ったところ友達が、

「お前、何持っとんじゃ、えらげにして・・・」

「狸つかまえたんじゃ今晚は狸汁じゃ、お前も食べにこい」

「何ぬかしとんじゃ、お前が掴んどんは松の木じゃ」

「何・・・、ほんまじゃ、手を握り替えた時にだまされたか」

いたずら牝狐

大橋前・江浪雪雄氏より聞書

昔々、三木郡の牟礼村に、人間の娘に化けていたずらする牝狐がおった。

ある日の夕方、村の若い衆が酒を飲んで良い機嫌になって、鼻歌を歌いながら家路についておったところ、向こうから美人の娘がやってきた。

擦れ違った時、娘が、

「もし、若い衆さん、私の家はすぐそこですから、一風呂浴びて 汗を落として、お帰りになってはどうでしょうか」

「いや、おらの家は近いけん結構じゃ」

「まあ、そんなことおっしゃらないで、是非どうぞ」

よせばよいものを、つい娘が美人であるのにひかれて、相伴することにした。

「湯加減はどうでしょうか」

「丁度、ええかげんじゃ」

やがて友達がやってきて、

「お前、さきんからブツブツ言いもって何しとんじゃ、早う野壺から上がらんか」

若い衆は田圃の畔道に立って、

「ええ風呂じゃ、ええ風呂じゃ」と繰り返しながら、辺り一面臭い匂いを撒き散らして、**身体中が黄金色に輝いていた。**

六萬寺の怪猫

祖母・天野イセより聞書

昔々、牟礼村の六萬寺に年老いた猫がおった。

この猫は近所の猫達の頭領格で、横笛の名手でもあった。

温かい日には大抵何時もの寺の広縁で寝そべっているが、時々友達の家を訪ねては、世間話に花を咲かせて一日を過ごし、和尚さんにはことのほか可愛がられて、誠に結構な身分であった。

和尚さんが檀家の法事等で寺を留守にするときは、友達を招いて得意の横笛を吹き、他の猫達は庫裏から昨日の余り物を遠慮なく取り出して、手ぬぐいで姉さん被りなどして、猫踊りを始め**本堂で大騒ぎをする**のが常であった。

こんなある日、和尚さんは檀家に法事があって出かけたが、思いの他早く終わったので、草々に寺へ帰ってみると、

「六萬寺よ、何時ものように笛を吹いてくれんかの」

「いや、今日は口のはたに出物が出とんで、吹けんのじゃ」

本堂から漏れてくるこの話を聞いてびっくりした和尚さんは、翌日、早速老猫を呼び寄せて、

「お前も薄々気付いておと思うが、かわいそうじゃが、これからは寺に置いてやる**ことが出来ない**ので、好きな所へ行って生活しなさい」

こんこんと諭して小豆飯をご馳走してやった。老猫は寺での最後の食事を済ませると、後を振り返り振り返りしながら出て行ったまま、二度と寺には帰らなかった。

このことがあってからは、**家で飼っている動物に小豆飯を与える時は、別れを意味すると言われるようになった**と言うことである。

丸山峠の怪

大橋前・川田忠義氏より聞書

昔はどこの家の子供でも、兄弟や近所の友達と連れ立って、途中に淋しい所があっても、かなり遠くても、祭といえど追っかけて行ったものである。

川田さんが子供の頃、庵治の神社の秋祭に弟と一緒にいったことがある。

庵治の町に入るには、長い坂の丸山峠を越さなければならないが、その頃のこの峠は、両側は山が迫り、覆いかぶさるように松の木が生えていて、昼でもなお暗くて淋しく、頂上にはお地藏さんが一基祀られていた。

弟と二人は石を投げたり、道の草をちぎったり、ふざけながら頂上に着いた時、くたびれ果て

たような独りの坊さんが、お地蔵さんの傍らで休んでいた。

ただの坊さんであったので、恐ろしくはない筈であるのに、何故か二人は、恐怖感におそわれ、**「ワァ・・・」**と大声をあげながら走って、庵治の町まで駆けおりたと言う。

大人になった今でも、それが何故であったかわからず、**このことを思い出すと、あの恐怖感がよみがえる**と言う。

（註）坊さんは、どこかの人の四国遍路の旅姿であっただろうが、その恐怖感は峠にすむ妖怪の仕業でなかっただろうか。

高 坊 主

祖父天野徳次より聞書

徳次爺さんは、慶応三年十二月十二日生まれの私の祖父で、これは、祖父が三十才か四十才の頃のことであると言うから、明治三十年か四十年の頃のことであろう。

その頃、祖父は四国民報（現在の四国新聞の前身であるかもしれない）に勤務していて、その日は早出の当番の日であった。

当時の四国民報は、現在の印刷技術が発達した近代的な新聞社と違って、記者から原稿を受け取ると植字して印刷し、それを配達するまでが一般社員の仕事であった。

その日もいつもの通り、ガッタンガッタンと大きい音をたてながら、手動式の輪転機を回して一枚一枚印刷し、ようやく夜中頃に作業が終ったので、早速、浜ノ町方面の配達に出かけた。

淋しい午前三時頃の暗い冬の凍てついた道を、弘憲寺の門前辺りへさしかかった時、どこからともなく、ザワザワと風の吹くような不気味な音がした。

暗がりの中を目を見開いてよく見ると、前の方から何やら黒い物がこちらへ向かってくる。

すぐ近くまでやって来た黒い物は、恐ろしさに寺の塀に身を寄せていた**祖父の頭を衣の袖で撫でて、ザワザワと音をたてながら南の方へ去っていった。**

後を振り返って見ると、身の丈が二丈程もあったので、あれは話に聞く高坊主であったのか、と思った途端に背中に悪寒が走ったと言う。

「お爺さん、そんな化けもんは聞いたことがないで・・・」

「お前は見とらんけんそんなこと言うんじゃ、お爺さんは見たんじゃけん・・・、高坊主はほんまにおるんぞ」

しかし、その後、祖父が見たという高坊主や火の玉、幽霊に出会ったことがないので、今でもなお半信半疑であるが、それでも、大橋前の川田忠義さんは、**高坊主に会ったという人を知っている**と言うので、本当の話かもしれない。

火 の 玉

祖父天野徳次より聞書

これは、祖父徳次が十五、六才の頃、木太村に住んでいた頃の話である。

その頃、祖父の家は八坂神社の南隣にあって、紺屋を営む兼業農家であった。

今でもそうであるが、農家では田植えが終り夏近くなれば、田圃の灌水作業におわれることになる。

その日も、祖父は父に言いつけられて田圃に行き、水を入れるために、水路に取り付けてある水車に上がった。

夜中頃まで踏み続けたので、

「もう、よかろう」と思って水車から下りようとする、八坂神社の南西にある溜め池の方から、『ウォォン・・・』という尾をひいた不気味な音が聞こえてきた。何だろうと振り返って見ると、自分の方に向かって青白い玉のような物が飛んでくる。頭を下げたそれをやり過ごすと、又、前の方からこちらめがけて飛んでくる。

それは、頭が風呂桶くらいあり、一丈くらいの長い尾をひいた火の玉であった。

何回も行ったり来たりしていた火の玉は、突然祖父の頭の上空で止まると、不気味な音をたて渦を巻いて回転しだした。

そこでとうとう祖父は気絶して、水車から転落して水路に落ち込んで、何が何やら判らなくなってしまった。

やがて、自分を呼ぶような微かな声がしたので、そっと目を開けてみると、祖父の父が畔に引き上げて介抱してくれていた。父に火の玉の顛末を話すと、

「帰りが遅いので表に出てみたら、田圃の方から池の方へ青白い物が飛んで行くのが見えたので、もしやと思って来てみたんじゃ」

祖父は、その後二度と青白い火の玉を見ることはなかったと言っていたが、父もそれが何であったか知らなかったのも、今もその正体が判らないと言う。

さ ら し 首

祖父天野徳次より聞書

昔々、藩政時代の頃、讃岐松平藩の罪人の処刑場は、現在の高松市花園町の家畜屠殺場のある所であった。

この場所で何時頃から何時頃まで処刑が行われていたかは、調査をしたことがないので知らないが、私が子供の頃は隣の松島町に住んでいたし、小学校はこの町の子供達と同じ東浜尋常小学校であったから、この処刑場の跡地（その頃は家畜屠殺場はなかった）へは時々遊びに行ったことがある。

処刑場は、御坊川に沿った西側の道に面して東向きに入口があり、入ってその正面に受刑者の霊を祀っていたのか、小さい御堂があった。御堂の南手はあまり広くない原っぱがあって、いつも雑草が生えていて、原っぱに踏み入ると、必ずと言ってよい程何かしら背筋が寒くなるような感じがして、すぐ飛んで帰ったものだが、それでも肝試しのつもりで、子供達はよくここへ遊びに行ったものである。

祖父が子供の頃、祖父の父が紺屋を営んでいたのも、罪人を処刑した日に、店の若い衆にカタ

クマ（肩車）されて見に行ったことがあったと言う。勿論、処刑の様子は見ることはできないが、切り落とされた首が木製の柄杓の柄に突き刺されて、御坊川橋の欄干に縛り付けてあった生首を見たことがあると言う。祖父は今でも、その情景の強烈な印象が忘れられないと話してくれたことがあるが、その頃は、祖父がまだそんなことを記憶しておく程の年齢になっていなかったと思うので、おそらく、祖父の父か誰かに聞いた話でなかろうかとは思いますが、どうであろうか。

明治初年頃までは、祖父がまだ子供髷を結っていたという、古い古い昔の話である。

私が小学生になった昭和時代になっても、**処刑場や橋の欄干辺りに人魂が出ることはあったと**、花園町で小さい鉄工所をしていた同級生の蓮井君のお父さんや、川魚の商売をしていた川西君のお父さんから聞いたことがある。

七十才のお爺さんになった今でも、どうしても通らなければならない時以外は、処刑場跡地や御坊川橋は避けて通ることにしている。

魚 魂

大橋前・天野 忠

私が水路部（現・海上保安庁水路部）に勤務していた、昭和二十年の初夏の頃、徳島県日和佐湾の水路測量を命ぜられて沿岸測量に従事していた時の話である。

宿舎にしていたのは、作業に便利のため最も海岸に近い日和佐漁業組合の二階であった。

その日は天候が悪化してきたので、沖での作業を中止して早々と宿舎に帰ってきたところ、朝茹でたのであろうか天日干しをして煮干しにするために、鰯の小さいのが、あさい四角の籠に一杯いれて、所狭しと並べてあった。

部屋に帰り測量成果を整理して、夕食も終り就寝して間もなく小便が出たくなったので、灯火管制で暗い階段を踊り場まで下りると、何やら闇の中で青白いものが一面に光っている。光はポッポッと息をしているようなものや、光り続けているもの、離れて宙を舞うものがある。ビクッとしたが近付いて見ると、籠の中にいれてある鰯である。

まだ見たことはないが、人魂とはこんなものであろうかと、小魚であることが分かったので、口に入れてみると美味い。部屋に帰ると、まだ起きていた青森県出身の鈴木一曹が、

「天野一曹、口の端が青白う光っておるぞ、それはなんじゃ」

「おお、これか。魚魂じゃ」

話には人魂は聞いていたが、これは魚から出たものであるからと、魚魂と名付けたがどうであろうか。

人 魂

大橋前・天野 忠

新田町に住む伯父天野時次郎が死んだ日の夜、近所の人達がお通夜のため伯父の家へ来る途中で、伯父の家の西の棟から**幾つもの人魂が飛ぶのを見た**と言う。

この日は、今にも雨が降りそうな夜であったという。

人 魂

中学校時代の恩師・波多江種一先生より聞書

波多江先生が、肺結核のため新田町の国立療養所に入院していた頃、雨が降りそうな日の夜になれば、病室から見える墓場から、**青白い人魂が飛ぶのをよく見た**とおっしゃっていた。

お化け屋敷

大橋前・天野 忠

私が子供の頃は、皆一様に貧乏であったから、大抵の家庭は借家住まいであった。

したがって家を借りる場合、賃貸借契約をする等の難しい手続きがなく大家と店子の信頼関係だけであったし、面識がなくても大抵は簡単であった。そのような具合であったからか、貸家が多かったからか、一つの町内には一軒や二軒位は貸家札が軒先にぶら下がっていた。

そのような状態であったからか、大家によっては空家を手入れするでなく、荒れ放題に荒れてそのまま放置されている貸家があちこちにあった。

あれは私が小学校の三年生の頃であったらうか、築地小学校の西に比較的大きい二軒続きの荒れ放題の二階家の貸家があって、そこに何時からかお化けが出るとの噂がたったことがある。

毎晩夜中になると、

「女のすすり泣きの声が聞こえる」

「いや、あの声は叫んでいるような男の声だ」と喧々愕々で、人々の間では見てきたような、尾鰭をつけた話が大きくなり、夜中になると大人達が一目お化けを見ようと、この家へつめかけるようになった。毎晩大勢の見物客がくるので、気の利いた夜泣きうどん屋が屋台を引っ張ってきて、商売をするようになった。一晩に五十人位の人が見物にくるので、大変な繁盛ぶりであったという。

私もお化けなるものを一度見たいと思って、学校から帰って鞆を放り出し友達を誘い、悪童三人組で探検に出かけて行った。

その家は、玄関を入るとかなり広い庭があって、庭の東側に高い木が二本あり、草がボウボウと生い茂っている。中へ進むと一階の座敷らしい部屋は、破れた障子や襖が倒れて物凄じい様相を呈している。

「出た・・・」と誰かが言ったので、背筋に悪寒が走りそこを飛び出て後を見みずに帰ってきた。大人達はこんな所へ夜中にくるのか、たいしたものだ大人は強いと思った。

この後お化け屋敷の噂はしばらく続いたが、何時とはなく沙汰やみとなったので、母に聞いてみると、あの声は首輪をしたまま捨てられた**野良犬が、苦しがつて泣いていた声**であったということであった。

ヨロヨロ船

大橋前・天野 忠

東北地方では、亡霊船や幽霊船のことをヨロヨロ船と言うらしいが、これは水路部（現・海上保安庁水路部）に勤務していた、昭和二十年の夏、徳島県日和佐湾の水路測量に従事していた頃、地元の漁師・島田さんから聞いた、敗色濃くなった太平洋戦争末期頃の実話である。

日和佐湾から外海へ一漕ぎ出ると、そこはすぐ太平洋である。

ある夏の日、沖の方から右へ左へヨロヨロしながら、大浜海岸をめがけて一隻の船が近付いてくる。この様子を見つけた一人の漁師が仲間に伝え、浜に集まった人達は、アメリカの船でないかと警察へ連絡に走る者、役場へ報告に走る者で平和な日和佐の町は大騒ぎとなった。

やがて近寄ってきた船は、ジャリジャリ音をたてながら、砂浜に乗り上げて停止した。よく見るとこの船は三十屯位の日本の機帆船で、微かなエンジン音がしている。人の気配がないので不思議に思って二三人が飛び乗ってみると、甲板は血の海で、これが地獄図会かと思われる光景が目にはいった。

舳先に据えられた一丁の機関銃に一人の日本海軍の兵士が、握把を握ったまま倒れている。右舷甲板には三八銃をもった若い兵士が折り重なって倒れている。操舵室の前には一人の兵士が、胸を撃ち抜かれて倒れている。操舵室には下士官がさっきまで舵をとっていたのか、舵輪を口にくわえた姿勢で頭を撃ち抜かれて死んでいる。後甲板には、若い兵士が倒れている。機関室に下りると一人の下士官が、エンジンに倒れかかって息絶えている。

「おーい、早おう上がってこい」

皆で一人一人の呼吸をうかがったが、誰一人として生きている兵士はいなかった。

これは、太平洋戦争末期の壮絶にして哀れな、一地方でおこった実話である。

この徳島県日和佐町の大浜海岸は、今では海亀が産卵のため上陸する町として人々に知られているが、昔、悲惨な出来事があった所であることを、今では何人知っているであろうか。

志度の兄弟

祖母天野イセより聞書

昔々、讃岐の国の志度村に、大変仲の良い兄弟がおった。

兄は山獺師で、弟は海漁師であつた。

ある日のこと弟が、

「兄さん、今日は志度寺の十六度市やし、観音さんのお参りも永いことしとらんで、志度へ行ってみよう」と誘ったが、兄はやり残した仕事があつたのか、鉄砲を肩に背負い何時ものとおり山へ入っていった。

弟は、久しぶりに市の賑わいを見物して、観音様のお参りも済ませて本堂で、ありがたい住職の法話を聞いている時、山の方からズドンと一発の銃声が聞こえてきた。

「兄さんやったな、・・・獲物はなんかいの」と思った途端、仏罰があたったのか、見る見る細くて小さい蛇の姿に変わってしまった。

知り人の知らせによって、このことを聞いた兄はびっくりして、とった獲物も忘れて志度寺へ飛んで行き、変わり果てた弟の姿を見て、涙ながらに家へ連れて帰った。

こんなことがあって後も、兄は山獵師をしながら、今まで以上に兄弟仲良く活していたが、弟は年を経るにしたがって体が大きくなり、とうとう家に入れきれなくなったので、

「永いこと仲良う生活してきたけど、こんな小さい家では一緒に住めんぐらいお前は大きくなってしまで、かわいそうやけど裏の池に移ってくれんかの・・・」

と弟を諭して、兄は弟を背負って裏の池に連れて行った。

それから兄は、とれた獲物は必ず弟に見せてあたえ、弟は今日あった色々の出来事を兄に話して、兄弟愛は益々深まっていったが、数年もしない間に弟は大蛇となって、又、この池にも住めなくなってしまった。

「兄さん、こんなに大きくなってしまえば、この池にももう居れんけん、屋島の西の海にある、大槌島と小槌島の間の瀬戸に連れて行っていた。これからは、日照りが続く年に酒を詰めた一斗樽を、その瀬戸に投げ込んでくれたら、私が飲んですぐ浮き上がらすけん。そしたらその御礼に大雨を降らすことにするけん」

兄は弟の健気な願いを聞いて、別れに涙しながら弟を背負って山を下り、志度の浜から舟で瀬戸に連れて行った。

これから間もなく、弟は龍神となり讃岐の国は日照りの年でも水に困らなくなったという。

グ ツ

大橋前・江浪雪雄氏より聞書

昔々、屋島のあるメンバ（地区）に、グツという真面目だけが取柄の子供がおった。

ある日、おっかあに、

「グツよ、米をといでしかけとるけん、飯を炊いとけ」と用事を言いつけられた。

早速、竈にコクバ（松葉）を詰め込んで炊いておると、釜から、

「グツグツグツグツ」と呼ぶ声がする。

「ハイハイハイハイ」いくら返事をしてもグツグツと言うので、グツは怒ってしまって、釜を土間に叩きつけてしまった。

又、何時かの日、おっかあに、

「グツよ、今日はおじゅっさんがお出でとるけん、お勤めが済んだら、風呂に入ってもらうけん、風呂を焚いとけ」と言いつけられた。

早速、風呂桶に水をいれて、風呂を焚いた。

「おじゅっさん、風呂が沸いたけん入っていた」

「おお、グツか、ありがとう。うん、こりゃちょっと温いぞ。もうちょっと焚いてくれ」

「もう、コクバが無いんじゃ」

「そこら辺にあるもん、なんでもくべたらええが」

「よっしゃ」

おじゅっさんが一風呂浴びて出て見ると衣が無い。

「グツよ、ここに置いとった衣が無いんじゃが、お前知らんか」

「さっき風呂にくべてしもたで・・・」

困ったおじゅっさんは、おっかあに茶袋を借りて、何時も他人より大きいと自慢しているチンポコを大切に袋に入れて、袋の紐を首に掛けて寺へ帰って行った。